

チャイナ・ミエヴィル『都市と都市』例会レジュメ

平成 24 年 9 月 29 日

【チャイナ・ミエヴィルとは何者なのか】

チャイナ・(トム・) ミエヴィル。発音はミ・エイ・ヴィルで第二音節がアクセント。1972 年生まれ。現在、英国にあるウォーリック大学准教授（英文学、比較文学）ⁱ。

書籍情報等は、課題本である『都市と都市』の解説やカバー折り返しに書いてある通りなので割愛。SF マガジンの略歴によると、ノンフィクション記事を多く発表しており、学術的雑誌〈歴史的唯物論〉の編集委員を務めるほか、コミックも書き、その作品はファンジンやセミプロジンに掲載されているとかⁱⁱ。また『アンランダン』には著者の描いたイラストが数多く登場する。

◆受けた影響について

レジュメに Wikipedia を使いたくはないのだが、いかんせん情報が少ないので軽く引用。

「ミエヴィルの作品は現代の多くのファンタジー・ホラー作家と同じく、20 世紀初頭のパルプ・フィクションから現代のテレビ番組や映画から影響を受けている。彼は M・ジョン・ハリスン、マイケル・デ・ララベッティ、マイケル・ムアコック、トマス・M・ディッシュ、チャールズ・ウィリアムズ、ティム・パワーズ、J・G・バラードを自身の『ヒーロー』として挙げている。また H・P・ラヴクラフト、マーヴィン・ピーク、ジーン・ウルフからの影響についても頻りに言及する。」ⁱⁱⁱ

とある。基本的には SF、ファンタジー作家中心のよう。上記の作家のうち幾人かの邦訳は現在では絶版だが、ディッシュやウルフは国書刊行会から〈未来の文学〉シリーズで出ているので読むことは可能。とはいっても、ミエヴィルは長篇作品の謝辞にはたいていこれら以外の作家名をあげるため、上記作家だけに影響を受けた、というわけではない。

少年時代は TRPG をやっていたらしい（おそらく『ダンジョンズ&ドラゴンズ』）。ミエヴィルの描く〈バス=ラグ〉シリーズはまさにゲーム的世界観。作家デビュー後にはその D&D と同系統の TRPG である『パスファインダーRPG』の設定資料集に名を連ねている。ほかにもアメコミの『ヘルボーイ』小説版アンソロジーや『ヘルブレイザー』シリーズ（『コンスタンティン』）のクリスマス特集号にも短篇を寄稿している^{iv}。このあたりは趣味か。

◆人物像と作品世界

以降はハヤカワ SF マガジン 2009 年 8 月号に掲載されたインタビュー^vを参考にして彼の人物像をより明確にしていきたい。このあたりはミエヴィルの作品理解には欠かせない点だろう。

・ファンタジー・SF・ホラーは同じ系譜に連なるもの。

→ミエヴィルいわく「ウィアード・フィクション」(weird は「不思議な、気味の悪い」の意)。

→1923 年に発刊したアメリカのパルプ誌に『ウィアード・テールズ』がある。ラブクラフトや C・A・スミス、ロバート・E・ハワードの作品などが掲載されていた。

「ぼくは現実にある矛盾に——社会の、政治の、個人の矛盾に——そして解決に——ただしすっきりした解決とはかぎらないが——興味がある。でもファンタジーにみせかけた政治小説やリレーションシップ小説を書こうとは思わない。ぼくはジャンル・ライターであり、そのことを大いに誇りとしているんだ。」

・「慰めになるファンタジー」を「完全な、徹底した、美意識のない現状肯定」とする。

→いわく、「最高のファンタジーは慰めを拒絶するところにある」。

→ファンタジイに対する意識は強い。非ハイ・ファンタジイ（トールキン）的世界＝〈バス＝ラグ〉。
・左翼。社会主義者。マルキスト。逮捕歴有り。

「十三歳くらいのころ、核廃絶キャンペーンにかかわり、その後、英国の反アパルトヘイト運動や、〃争点（イシュー）〃の政治的活動にかかわった——特定の争点を問題にした活動ということだ。」

「学位を取得しようとしていたころ、社会主義理論を読みあさってものごとにつながろうと努めてきたそれまでの断片的なやり方にすっかり飽き足らなくなった。」

→ロンドンで社会党（社会主義労働者党）の候補者にもなった。勝つ気はなかったらしい。

→書籍化した博士論文は「国際法におけるマルクス理論」と訳せそうなタイトル。

→地元の託児所の閉鎖（保守党が強引に通したもの）に対する抗議をし、会議室を乗っ取った。そのさい、警察によって手荒に部屋から出ていかされたとか。そのため逮捕された。

→一連の経験は『ペルディード・ストリートステーション』の一部描写や世界観に活かされている。

「政治的な構成要素は、僕が非常に強く重要性を感じているものだ。[...]なぜならあらゆる社会的作用を剥ぎ取ってしまう運命とか宿命とかいう考え方が嫌いなんだから。」

【課題本『都市と都市』について】

ヒューゴー賞長篇部門、世界幻想文学大賞長篇部門、ローカス賞ファンタジイ長篇部門、アーサー・C・クラーク賞、英国SF協会賞長篇部門受賞作。ひとりでクラーク賞三回目は史上初。

本人いわく、「東ヨーロッパ小説とハードボイルド犯罪小説とファンタジイの三つが合体したもの」。

タイトルはアーサー・C・クラーク『都市と星』THE CITY AND THE STARS のもじりか。

ちなみに、本作に類似したアイデアの作品として筒井康隆の短篇「融合家族」^{vi}がある。

◆謝辞に書かれた作家名から読み取れる目論見・構想

レイモンド・チャンドラー……ハードボイルド・推理小説的要素。

フランツ・カフカ……幻想小説的要素。実際にはありえないが、文章上では想像可能な世界？

アルフレート・クービン……ドイツの幻想画家。『カリガリ博士』の背景画などで活躍。

シュルレアリスムに影響を与えたとされる（ミエヴィルは「ファンタジイをつきつめたところにシュルレアリストがいる」と述べている）。

ジャン・モリス……欧米では圧倒的な人気を誇る歴史・紀行作家。世界観描写の参考にしたのか？

ブルーノ・シュルツ……「肉桂色の店」は幻想的な夜の街を描いた短篇。

→『都市と都市』は作者の手がける〈バス＝ラグ〉（ゲーム的）世界ではなく、カフカ・シュルツ的な非現実的・幻想的（いわばシュルレアリスムの）都市を舞台とし、そこで起きる犯罪をチャンドラー的な推理小説の方法論で描こうとした作品といえるのではないか？

◆二つの都市の特殊性・異常性

・専門用語あるいは造語の多さ

→国家・都市のアイデンティティ、法。

・管理社会的制度

→二重思考（cf. ジョージ・オーウェル『1984年』）的な訓練、監視の内在化。

・超法規的・超常的存在—ブリーチ

・オルツィニー、あるいは都市の歴史

◆二つの都市の現実性・日常性

- ・執拗なまでに登場する実在の固有名詞
 - 外部（「われわれの」）世界の存在を示す。異世界でありながら現実世界。
 - 寓意性を増すように思われるが、注意する必要。犯罪が起こりうるロジックとしても扱える。
- ・「異常さ」のない犯罪
 - ゆえに衝撃は少ないが、それは「現実世界の」犯罪として成立しうる。

◆ミステリとSFのあいだで——本作では何が描かれたのか？

- ・設定に対する説得力
 - ありえないことをありうるように読者に思わせる筆力、世界観描写の巧みさ。都市の描写の細かさではなく、いかに読者にその世界を受け入れさせるか。ただし空想科学小説ではない。
- ・フーダニット（本書解説参照）であるか？
 - 犯罪を行う目的や、方法、それを行う人物は確かに理にかなっている。
 - 「本格」ではないように思われる。イギリスでは本格を「クラシカル・フーダニット」と呼ぶ^{vii}。それが本作を本格推理小説として読もうとした人が肩透かしをくらう理由ではないか。
- ・「見えない」人
 - 本来はありえないミステリのそれを成立させることができる世界。逆説的にSFとして成り立つ。
 - 主人公が見えない人になるという点で、試みとしては十分成功している。
- ・「見ない」人
 - 意識・無意識に関わらず情報を遮断しようとするまう人の異常さ。滑稽さ。
 - 現実世界でも起こりうる。われわれはそれを日常生活でおこなっている。
- ・都市の犯罪
 - 都市の法（ルール）、情勢、都市そのものが犯罪を引き起こす／助長する要因となっている。
 - 〈ブリーチ〉行為を起こさないという異常な世界の「正常」な犯罪。

◆結末における主人公

- ・「アシル、おれがやるよ」
 - 事件解決のためには為さねばならないことであり、都市と都市のあいだを知ったボルルの決断。
- ・「わたしはその二つのうちどちらも選ばないという選択をした」
 - ボルルはそもそも選べるような状態ではなかった。〈ブリーチ〉を犯した人間は引き返すことができない。ゆえにこれまでの世界に別れを告げなければならない。

【ミステリ／SFにできること——ニュー・ウィアードの考え方】

- ・ミエヴィルの属す「ニュー・ウィアード」とは

The New Weird is a literary genre that began in the 1990s and developed in a series of novels and stories published from 2001 to 2005. The writers involved are mostly novelists who are considered to be parts of the horror and/or speculative fiction genres but who often cross genre boundaries. Notable authors include China Miéville and Jeff VanderMeer. (ウィキペディア海外サイト) ^{viii}

- ・SF的見地からミステリを書く、ミステリ的見地からSFを書く。
 - ジャンルミックス作品として日本のミステリは成功しうるのか？

- ・米澤穂信『折れた竜骨』
- ・有栖川有栖『真夜中の探偵』
- ・小川一水『トネイロ会の非殺人事件』
- ・芦辺拓『スチームオペラ』

→より本格の要素を深めようとしている？

- ・既存の枠組みを守る／壊す？
- ・ミステリ読者として注目すべき部分とは？

主要参考文献等

i ウォーリック大学 HP 人物サーチ

<http://search.warwick.ac.uk/profile?id=MDY3NDczNWYxODJlYmU%3D>

ii 日暮雅通 編「略歴&著作リスト」SF マガジン 2009年8月号、早川書房 掲載。

iii フリー百科事典 Wikipedia「チャイナ・ミエヴィル」

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%A3%E3%82%A4%E3%83%8A%E3%83%BB%E3%83%9F%E3%82%A8%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%83%AB#cite_note-2

iv チャイナ・ミエヴィル（日暮雅通 他訳）『ジェイクをさがして』ハヤカワ文庫 SF、2010年 訳者あとがき。

v 日暮雅通 訳「ファンタジイを引っかき回す」（初出〈ローカス〉2002年3月号）SF マガジン 2009年8月号、早川書房 掲載。

vi 筒井康隆『筒井康隆全集 第10巻 家・脱走と追跡のサンバ』新潮社、1984年 所収。

vii 本格ミステリ作家クラブ HP 有栖川有栖「本格ミステリ作家クラブ（準備会）設立に寄せて」

<http://honkaku.com/data/data.html>

viii The Free Encyclopedia "New Weird" http://en.wikipedia.org/wiki/New_Weird

SF マガジン 2012年2月号、早川書房

チャイナ・ミーヴィル（村井智之 訳）『キング・ラット』2001年、アーティストハウス

チャイナ・ミエヴィル（内田昌之 訳）『アンランダン（上・下）』2010年、河出書房新社

チャイナ・ミエヴィル（日暮雅通 訳）『都市と都市』2011年、ハヤカワ文庫 SF

チャイナ・ミエヴィル（日暮雅通 訳）『ペルディード・ストリートステーション（上・下）』2012年、ハヤカワ文庫 SF